

PHD

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

LETTER

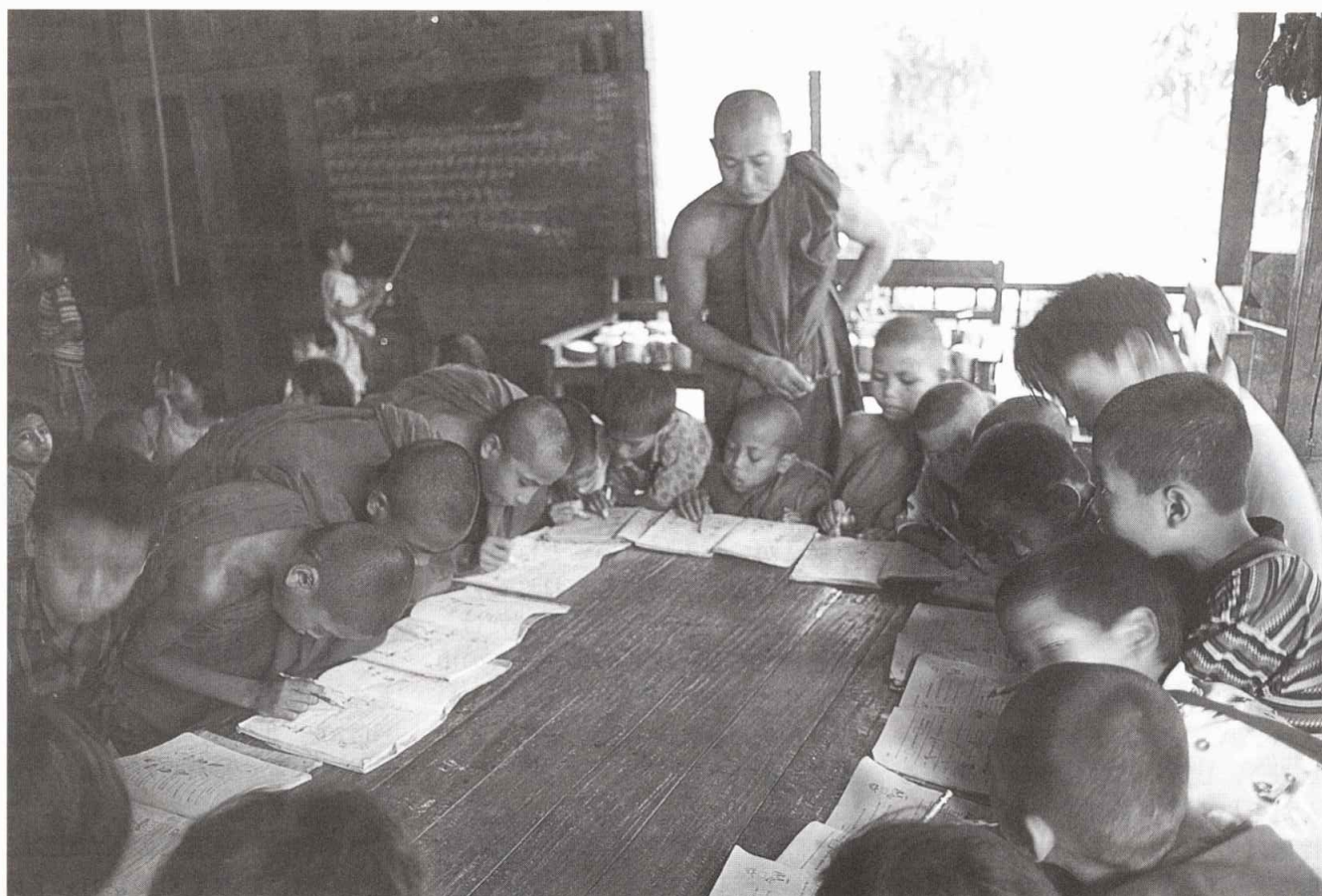
84

2002. 9

- 東西南北問題解決取組日記 …… P2-3
「ビルマ」特集
- 研修レポート …… P4-5
- 林業体験合宿～下草刈り …… P6

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり (Peace) 健康づくり (Health) を担う人材をつくる (Human Development) 運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：藤野 達也
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867
E-mail: phd@mb1.kisweb.ne.jp
URL: http://www.kisweb.ne.jp/phd
定 価：100円



ビルマ、マンダレー近郊 撮影 FUJINO T.

人口約2千人の農村にある寺子屋。
貧しくて学校にいけない家の子も
ここなら来れる。
百人を超える子供たちの面倒をみるのは、
このお寺に来て30年のお坊さん。
年長の子供がそのお手伝い。

東西南北
問題解決
取組日記

ビルマは今

今年度から研修生招聘を再開したビルマ。折しもスーチーさんが解放され、早速日本政府は部分的だがODA再開を決定する等、動きが見られることは前号でもお伝えしました。2003年度の研修生の選考のため7月に訪ねたところで感じたこの国をレポートします。

こちらの方が日本よりサステイナブル(持続可能)な社会?

ビルマは経済発展が遅れているという。確かにそうだ。町のホテルでも何度も停電し、村には電気も電話もきていない。道を通る車のほとんどが日本の中古車。ネ・ウィン時代にマツダと仲よしだったため多く買った軽サイズの四輪トラック、オート三輪だってまだ現役。おそらく40年は経っている。トラックは日野のボンネット型が多い。日本車以外だとイギリス統治時代のバスだってまだ走っている。ラングーン(ヤンゴン)の路線バスはそのまま日本の会社のもの。



スペアパーツ等まず純正品などないだろう。しかし車は40年50年使えるんだという証明を町中でしている。性能は劣っても、モノ、人を運ぶ基本は十分押さえている。排気ガスは汚く、燃費も良くない。しかし、次から次へとモデルチェンジし、新たな資源を使い、使えるものまでゴミにしていく日本をはじめとする豊かと言われる国々のあり様と較べてみると考えさせられる。お金があるから新車を購入し、それが経済を活性化させている仕組みはよくわかる。しかし、それはいつまで続けられるのか。ある程度の便利さは必要だ。車をなくすことは非現実的だが、量を調節したり、使えるものはとことん使うことは、限りある地球資源を考えた時に必要なことではないのか。世の中、

実用一点張りでは潤いが無い、趣味的な部分もあることもわかった上でこの思い。

中古車の流れの中に、時折見られるピカピカの四輪駆動車、これも日本製だが、聞けば政府の偉いさんか麻薬で稼いだ人のものとか。この国では、まだNGOの存在は弱く、他のアジアの国々のようにNGOの人が四駆を乗り回すことは見かけない。

軍事政権がグローバリズムから守ってくれてる?

経済のグローバル化がもたらす恩恵だけでなく、最近では公害が指摘されるようになってきた。ビルマにも民間企業の活動は存在し、日本製品の宣伝も町ではよく見かける。例えば、コニカ、日立、キャノン、JT等々。でもここにはマクドナルドがない、ケンタッキーもない、あのコカ・コーラもマレーシアからの輸入品で国中に普及しているとは言い難い。庶民が貧しく、外国からのものを買うだけの収入がないことも事実。しかし、政府がメディアの規制をし、宣伝も含めて情報をコントロールしていることも理由のひとつだ。衛生放送の設備を持てれば、外国情報はとれるが、それは限られた層の話。政治や社会の動きがつかみにくいことはあふれる企業の宣伝活動にもふれにくいことでもある。一般には国营放送だけ。(それでも最近はこのニュースの中にNHKやCNNが部品のに使われている。)その前にテレビを見ることのできる層が少ないこともある。



急に目につきだした味の素の袋

政府が今の路線を続ける以上、欧米は経済制裁、援助停止を続ける。これはその企業の活動を盛んにさせないことにつながる。日本は欧米の目を気にしつつも、早くやりたい。アジアの一員として別の姿勢もと、援助を再開し、企業も中途半端にやっ

ている(来るべき日に備えてだろうが)。これがこの国を多国籍企業による搾取から守っている。文化もそう簡単には変わらない。ここでは男の人もロンジーと呼ばれるスカート状の布をごく普通にはく。暑いところではこれは快適。まだまだジーンズにはやられていない。

だからといって、今の社会の有りが決まれば良いとは言えない。でも結果的にこんなことになっている現実をどう判断すればいいのか。これも結構難しい気がする。

でも庶民はお金が欲しい

いろいろあることを知ってしまえば手に入れたくなる。これはここも変わらない。お金があればできないこともいろいろできるし、欲しいものも手に入る。でもこの国で稼ぐことはとても大変。村で1日、農作業をしてもらえるお金は女性300kyat(以下k) 男性400k。1kの実勢レートは日々変わるが、今回は1k約0.14円。一日働いて50円に満たない。学校の先生の1ヵ月の給料が5k=700円。この収入水準の上で、例えばテレビは25wk、自転車は7万、バイクは新車が300wk。

村に住み、農業を自営していればとりあえず食べることはできても、何か外から買うことは大変。でもいろいろ欲しい。どうする。そこで最近大流行りなのが宝くじ。いろいろあるが、政府公認のものが月1回、一口70k。非合法のものもいろいろあってタイの宝くじの当たり番号を使うものが月2回、額はいろいろ、当たれば500倍。中国系の人仕切の村レベルで行われるものが月に7回、当りは80倍。警察には袖の下で、見のがしてもらおうという。村では茶店がそのセンターとなり、女衆も熱心。研修生の村では一回で20wkの売上げという。

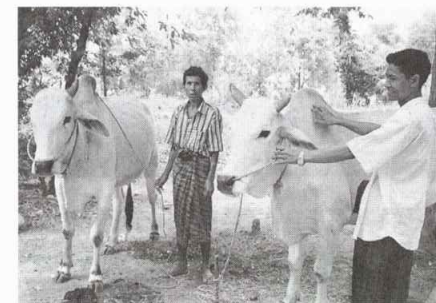


お寺の近くで見かけたくじ販売車

地道に稼ぐことは難しいから一獲千金を夢見てという気持ちは日本以上に強いようだ。11期生トゥンティンさんのお連れ合いも、彼に隠れて買ってるんだと。当たったかどうかは聞き漏らした。

牛が減っていく

ビルマ中部の農村の景色といえば白い2頭立ての牛車や田をすく様子が外せない。しかし、聞けば村の牛の数がどんどん減っているという。その理由の一つに10年程前から政府が年に2回お米を作るよう奨励するようになったことがあるという。年の2回目に耕す時、牛の足が田の土の深くまで入ってしまい、早く疲れてしまうため、機械の動力が必要になってきたからと聞いた。中国製の耕運機が80万~100wk、牛1頭は15万~25wk、水牛は10wk。牛の餌は村にありお金はいらぬが、耕運機は燃料がいる。肥料になる糞がなくなり、化学肥料を買う必要も出てくる。そしてトゥンティンさんの村では少し前まで40頭いたのが今や25頭になったそうだ。

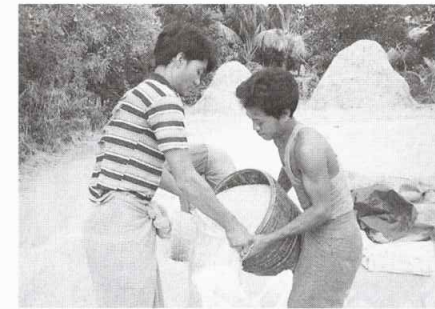


そうして得られる収穫のうち、水田からは政府には1エーカー(約0.4ha)につき、1年に10バスケットを1バスケット350kという安値で納めなければならない。外に対しては約7倍の2千~2.5kで売れるのだが。畑の場合は綿で納めるか、1エーカーにつき3kを支払うよう決められている。お米を納めきれない人はヨソから買って、政府に逆ざやで売ることになるそうだ。

化学肥料については20年前から安く配布されることが始まり、今は地方の役場と台湾等から輸入する肥料会社が組んで各戸に1エーカー当たり決まった量を割り当ててくる。むろん有料。もし、必要のない家は、その分をヨソにまわし、ともかく一

つの村での消費量を安定させている。

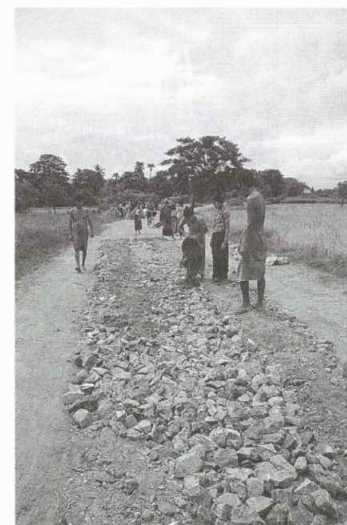
こうしてこれまで人と牛と土との間でお金なしでまわしていたサイクルが、薬と機械が入ることによってお金なしでまわることがなくなってしまふ。



これがバスケットの大きさ

強制労働? 労力奉仕?

ビルマを語る際によく課題となる強制労働のことについて村の人に聞いてみた。今も月に1~2回、草むしりや木を植える、また道を整備するという上から命じられる労働奉仕は今もあるという。さらに政府の偉い人が行事でやって来る時には、サクラとして動員させられてその行事を盛り上げることもある。ILOが監視をしていることもあり、露骨なものはマンダレー近郊ではないらしい。ところが、研修生の村では6人の男性をポーターとして国境周辺に送らなければならぬ。期間は2週間から1ヵ月程度。軍の兵隊のために食料や武器を運ぶ仕事。今もシャン州でSUREと、カレン州でKNUと戦闘状態が続いている。政府の公式報道には出てこないが、BBC、VOA(VOICE OF AMERICA)、RFA(RADIO FREE ASIA)といったラジオ放送で情報が得られる。村にいて仕事がないので志願する人もいるが、ともかく人数を揃えて、村の人が支えて送り出す。国境近くは多くが山岳地帯で仕事はきつく、途中で逃げてくる人もいるという。こういう形を何というのかわからないが、今もこのようなことがある。



道を直す

他にもいろいろ

マンダレーの町から研修生の村へ向かう途中、水田地帯の中に画一的な家並みの一帯が現れてくる。戸数は数十は下らないだろう。聞けばここはニュー・サテライト・タウンと呼ばれ、88年以降にマンダレー市内に住んでいた人々を移り住ませたところだ。町の中に政府が場所を必要とする時に、そこに住んでいる人々を立ち退かせ、一戸につき12 x 18メートルの土地をあてがったところだ。元々水田だったところで、ここの土地も耕作していた人から召し上げることになる。元々この国の土地の所有者は全て国であり、個人が所有することはない。使用権が認められているといえいいだろうか。それを人々は売買して、土地を所有しているに準じた形になっているようだ。本来が国のものであれば、この移住も不法とは言えないだろうが、人々は振り回される。ここに移らされた人たちは仕事場から遠くなり、不便をしいられている。

またガソリンの配給制の話も興味深い。庶民が車を持つことはないにしても、バイクは少しずつ普及している。小型車では1台につき1ヵ月30ガロン(1ガロン=3.8ℓ)までで180k/ガロン、バイクなら10ガロン

までその値で国营のスタンドで買える。足らなくなると闇という民間のスタンドで買うのだが、1100k/ガロン。不思議なところだ。スーチーさんが解放されたとはいえ、まだまだ先行きは見えない。「もし、民主化され、他の国々とのやりとりが自由になったからといって、それで全てが解決するわけではない、国民にそれを受け止める能力がなければ、例

えば経済は他の国の人に牛耳られてしまう恐れがある」と12期生トゥンティンさんは話してくれた。政治体制の変化だけでなく、ビルマの人々全体の教育、人材育成が大切な課題であることは間違いない。

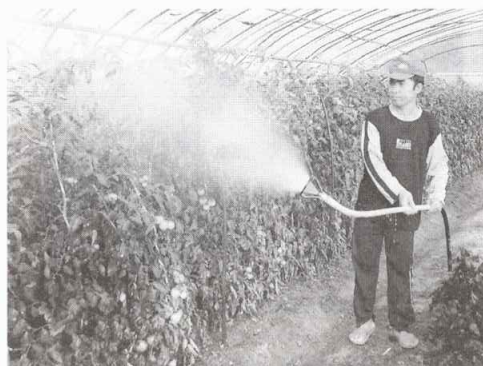
総主事代行 藤野達也

20期生 5月下旬～8月初旬

猛暑の中、20期生の3人は風邪をひいたり、夏バテすることなく元気に研修を続けています。帰国した研修生たちから来日前に日本語をかなり習ってきており、例年よりも日本語の習得が早い20期生。研修指導者の方々とも結構突っ込んだ話ができている。

スラチ・パティスティクンさん (タイ、男性、29才)

- 農業研修—
1. 渋谷富喜男 (神戸市西区)
 2. 大森昌也 (兵庫県和田山町)
 3. 渋谷雅弥 (神戸市西区)
 4. 寺田まさふみ (兵庫県出石町)
 5. 中野宗嗣 (兵庫県春日町)
- <敬称略>



水のかで虫を落とす (神戸市西区)
本人と話す結構しっかりと「やる時はやり、見るべきことは見ている」ことがわかります。

スラチさんの世界

来日してから独特のとぼけたセンスで周囲を笑わせてきたスラチさんですが、研修先では新たな実力(?)も発揮しはじめています。

どこへ行ってもある程度自分の生活のリズムを大事にし、勉強一筋というタイプでもないスラチさんは、研修の合間を見つけてはふらりと姿を消し、竹を切り出したり廃材を拾ってきては色々なものを作っています。例えば、パチンコ。その射撃の腕前といったかなりのもので、スズメ、ツバメ、カラスを行く先々で打ち落とされています。スズメの丸焼きが夕食の一品に並んだこともありました…。

そのマイペースさが時に「やる気がないのかな」と取られてしまうこともありますが、



昔ながらの除草法 (和田山町)

研修生レポート

スウェウインさん (ビルマ、男性、23才)

- 農業研修—
1. 藤井誠次 (神戸市北区)
 2. 橋本慎司 (兵庫県市島町)
 3. 一色作郎 (兵庫県市島町)
 4. 牛尾武博 (兵庫県市川町)
- <敬称略>

「日本の有機農業はすごいけど…」

初めての研修先であった藤井さんの所では、手で田植えをする機会がありました。トゥンティンさん(93年度)から疎植(2～3本の苗を1株として、株間を十分空けて植える方法)の方がしっかりとした良い稲が育つと聞いていたスウェウインさんでしたが、実際にやってみてびっくり。「ビルマではみんなたくさんの苗を1株にして、とても狭い間隔で植えます。農民はその方が多く取れると



産消提携について話を聞く (市島町)

思っています」
アイガモ農法にも興味津々で、害虫駆除、除草、施肥など人間顔負けのアイガモの働きの大きさに「ビルマに帰ってすぐにするのは難しいけれどその効果は参考にします」そうです。また、スウェウインさんのノートには益虫の上手な利用方や害虫の嫌う植物や野菜を畝間に植えるやり方、ワラを畝に敷いて雑草を抑えるなど自然の摂理を大切に有機農業の様々な技術や工夫がびっしりと書き込まれています。
そんなスウェウインさんから耳の痛い一言。「日本の農村には若い人が少ないですね。食べ物の多くを外国から輸入しているし、これから日本の農業はどうなりますか」



「とてもおいしい卵がとれますね」 (神戸市西区)

- ダルミアティス (通称ミミ) さん
(インドネシア、女性、30才)
- 洋裁・保育研修—
1. 高橋武子 (三木市)
 2. 太陽保育園 (兵庫県八鹿町)
岸政次郎 (滞在・アレンジ/八鹿町)
 3. くらふとぎやらりー多田 (芦屋市)
芦田安紀子 (芦屋市)
西本宣之・玲子 (滞在/芦屋市)
 4. 岩佐康子 (姫路市)
 5. (特活)はらっぱ (西宮市)
- <敬称略>



ミシンを見つめる目は真剣そのもの (三木市)
るのか楽しみです。

本当に初めて?

PHDでは、来日してから少し落ちてきた頃に、通訳の方を介して研修生一人一人に日本での研修計画の相談をします。そこでミミさんは、「村ではサルン(巻きスカート)を作るために真っ直ぐ縫ったり、破れを繕ったことしかない。ミシンも壊れているのであまり使ったことがない」と話していました。

ところが、実際に研修が始まるとうろたえてしまいました。電動ミシンのスピードにもすぐ慣れ、すいすいと上手に縫っていきます。型紙の取り方もマスターし、子供服から自分のブラウスやスカートなど次々と仕上げ上げていきます。ボタンホールや袖の取り付けなども「正直言って、何年も教えてる他の(日本人の)生徒さんたちよりもすでに上手ですよー」と指導者の方がおっしゃる程です。「まだまだ全然わかりませんが」と謙遜するミミさんですが、今後どこまで上達す



太陽保育園にて (八鹿町)

2児のお母さんであるミミさんは保育園でも落ち着いたものです。始めは恥ずかしがっていた園児たちともすぐに打ち解け、インドネシアの料理を作ったり、歌を教えたりと仲良しになれました。
「日本の保育園は子どもたちのことを色々考えてあげているのがとても良いと思います。私の村にはないけれど、同じようなことができれば村のお母さんたちも喜ぶだろうな」と感想を話してくれました。

帰国研修生短信

帰国した研修生たちの現在の様子をお伝えします。

「私のやり方をしたいという人が少しずつ増えてきたけれど、まだ頭の固い人がほとんど。人の考え方を考えるのはとても難しいです」

引き続き幼稚園の保母さんをしていきます。園児の数も今では65人(1.5～5才)と年々増えています。夕方にはボランティアで小学生に字を教えたりもしています。

昔に比べるとだいぶ良くなったようですが、村のお母さん達の育児に対する関心の低さが問題とのこと。「今の保母さん4人はみんな違う村出身。

将来はこの村から保母さんが出てくれるのが夢」だそうです。

「村の人に正しい歴史を教えられるようになりたい」とマンダレー大学の院で歴史を勉強中。奥さんも大学の1年生で物理を学んでいます。最近奥さんの実家の方に引っ越し、義母のお店の手伝いもしています。

5～7月は豊作だったマンゴーの収穫でとても忙しかったそ

うです。近くの町だけでなく中国に出荷しています。

忙しい中でも、村のグループの一員としてがんばっています。7月にはトゥンティンたちと一緒に有機農業の研修旅行に行きました。



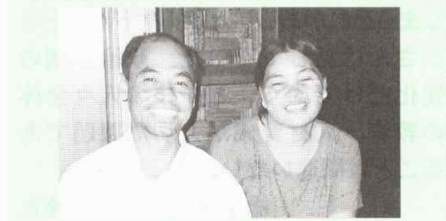
左からムームーさん、トゥントゥンさん、カインさん

3月に結婚しましたとお手紙と写真が届きました。ゆっくり時間をかけて、新しいグループを作って洋裁等を教えたいそうです。詳しくは次号でお伝えできると思います。



ネパールサビトリ・バスターラさん (98年度)

引き続き国際NGO、CAREの職員として、HIV対策関係の仕事をしています。相変わらず忙しく国内外を飛び回っています。
「村での活動は少しずつトゥンティンさん達に任せ、自分は要所を締める役割になれば」と話していました。



ビルマウィンさん (92年度)

5月に3男が誕生。村のグループのまとめ役として精力的に活動中です。牛を6頭飼い、その糞で上手に堆肥を作っています。日本で学んだ疎植の稲作りを実践し、村人にその良さを説いて回っています。



トゥンティンさん (93年度)

第12期林業体験合宿～下草刈り

この夏、最も暑い一日に学んだこと

14人の参加を得て、7月6、7日兵庫県篠山市大山新において、第12回林業体験合宿～下草刈りを行いました。篠山森林整備事務所の職員さんの案内による「ささやま浜谷水辺の森」(里山)の見学からプログラムはスタート。里山とは、人が薪を切り出したり、きのこ・山菜を採ったりして、人が使いやすいようになった山のことで、この森の中に松茸栽培(非常に難しいとのこと)の試験林があるという説明もありました。夕方には、このプログラムに協力いただいている大山振興会の理事数名の指導をおおぎ、参加者それぞれが翌日に使う鎌を砥ぎました。PHD研修生3人は村で刃物を常用しているだけあって各々の方法で上手に砥ぎ上げました。夕食は、有機野菜を使って、ボランティアが腕によりをかけて作りました。夜の学習会では、大山振興会の長澤幹男理事長、園田良太郎前理事長から同会の歴史をうかがい、「ウータン・森と生活を考える会」代表の西岡良夫さんにはスライドを交え、熱帯林の現状の説明を受けました。2時間の充実した時間のあとは近くの温泉に入り、翌日の本番に備えました。

を現し、下草刈りの実感が湧きました。宿泊所に戻るやいなや、ミミさん(インドネシア)は昼食も摂れず、横になっていました。昼食後、まとめの時間には、それぞれが印象に残ったことを書き出し、お互いに詳しい説明をして、意見交換を行いました。



12期目を迎えたこの合宿が、今年度から研修生全員に対する研修の一環となりました。かつての研修生の「日本には木が全然ないのだと思っていました。(山を見て)こんなにあるのなら私の国の木を切らないで。」という言葉が衝撃的でした。現在、輸入材が大量に使われていますが、その木材は違法伐採された物も多いと聞いています。森林が減少することにより、自然のバランスが崩れ、住民の生活が脅かされるという状況も生まれています。森林が減少するのは輸出のためだけではなく、その土地に住む人々が薪にする等、自分自身の生活のために行い、このままでは木がなくなると分かっているにもかかわらず止められないという理由もあります。また、

一方日本では、安い輸入材に押されて、これまで建築に多く使われてきた日本産の木材があまり売れなくなっています。40年50年育てた木であっても、労力や経費に見合うだけの利益がないのが現状です。当会が招いている研修生たちは、すでに「日本はすごい!」とだけ思っている訳ではないでしょう。さらに今後は各地を訪れ、日本の社会問題を学びます。今回の林業体験合宿は、林業に関わる人々の思いや仕事の大変さ、また、経済的な問題を知る良い機会となりました。

財団法人大山振興会とは

1971年設立。町村合併を繰り返し、さまざまな問題を抱えながらも篠山市大山地区の先人が植林を行ってきた山林を維持し、管理することにより、地域振興と住民の福祉増進に寄与することを目的としています。林業振興、農業振興、道路、公共施設の整備のほか、福祉、教育文化事業を展開しています。組織の起源は天保年間(江戸時代)の「趣法山」と名づけられた地域共同の植林運営にさかのぼります。

「山はコミュニケーションの場であり、親から受け継いだ山の世話は、自分の義務である。今はお金にならないけれど、20年後か30年後か日本の木材が売れる時のために木を育てていかなければならない。今やらないとその時にすぐには育たない。」と、園田前理事長は話されました。



翌日は、前の晩の雨風はどこへやら、快晴になり、地元の皆さんと8時から12時頃まで下草刈りに精を出しました。非常に暑い中での作業となり、研修生たちも後半は休憩が多くなりましたが、なんとか終了。最初はスギ・ヒノキ・ケヤキが、他の草木に埋もれていたのが、山を下りる頃には姿

焼畑農業を行う人々は人口増加にともない、土地を焼くスピードが早くなって森林は減少し、これまでのサイクルができなくなっていく、ということも起こって

継続したご支援に感謝いたします

6月の会報とともに会費納入のお願いをお送りしました。毎年6月に会費のお願いをし、6月と7月の2ヵ月間で年間会費収入の約半分をいただいています。年間会費収入の目標を900万円としており、今年の6月と7月では407万円の会費収入がありました。これは金額と件数で見れば、例年並みという状況です。しかしこの2ヵ月間の新規会員数は19名で2000年度の37名、2001年度の32名と比較してかなりの減少となっています。新規会員が減少しても金額と件数で例年並みを保ったということは、今

まで支えてくださっている継続会員の方々のご協力があったことと、金額や納入率等厳しい状況であるということをご理解いただき、継続してお支払いいただいたことを感謝しております。本当にありがとうございます。

これからたくさんの方にPHDを知って賛同していただき、会員となって支えていただけるよう努力をしていきます。研修生を通して村づくりを応援するPHDの活動は、継続したご支援を必要とします。これからもよろしくお願い致します。

〇月×日のPHD協会

職員 藤野 10日間で4晩の夜行便での移動。時間と宿賃の節約にはなるものの、明けが仕事ではさすがにキツイ。年相応の体力を知る。

職員 古本 苦心したお願いが通じ、会費実績6、7月は何とか例年並。しかし、寄附が落ち込み、気分は晴れず。次の策は皆さんからもお知恵を。


職員 芳田 冷房のスイッチ入時決定部長に就任。節約も大切だがこの夏の暑さでは能率低下も重大と、限界に達すると声をあげてスイッチへ。

職員 佐々木 だいぶ関西の水になじんできたとはいえ、まだまだ随所にぎこちなさが。加えておやじギャグに女性陣からブーイング。

職員 納堂 酷暑の日本を離れビルマに出張。村はコンクリートの照り返しがない分、涼しく、快食、快眠、快便で過ごす。でも帰って、お熱が。

職員 寺田 事務所の大模様替えを指揮し、秘められた才能を示す。続いて事務所内の機械類の修理に意欲。分解するだけでは困るとの意見も。以上、ここ5年間で体重の変化が激しい順。

この夏、



PHD Tシャツは活躍しましたか?

今年の夏は異常な暑さでした。職員もある時は事務所で、ある時は交流会で、ある時は海外出張で、PHD Tシャツを愛用し、暑さを乗り切りました。また帰った研修生もアジア・南太平洋の村のあちらこちらで着てくれています。まだ持っていない方、まだ間に合います。事務所までお問い合わせを！ホームページにも載っていますので、ぜひのぞいてみてください。

PHD NEWS

◆会費・ご寄附寄託状況

2002年5月	60件	¥1,307,414
2002年6月	339件	¥2,287,600
2002年7月	442件	¥3,680,160
	841件	¥7,275,174

以上の通り、多くの皆様よりご浄財を頂戴しました。厚くお礼申し上げます。依然、厳しい状況が続いております。より一層の「あなたの力」をご協力お願いいたします。

◆ご寄贈ありがとうございます。
去る6月7日、神戸にある近畿労働金庫神戸東支店様より、机、椅子等事務用品のご寄贈を受けました。ありがとうございます。

◆今年のNGO大学は9月開講
今年で16期を迎える国際理解・国

際協力入門講座「関西NGO大学」(主催:関西NGO協議会)。9月21、22日を皮切りに来年2月までの6回シリーズです。定員50人。お問合せ、お申し込みは関西NGO大学事務局:電話06-6377-5144まで。

◆年末タイ・ツアー参加者募集
元研修生たちの村を訪ねませんか。カレンの布のグループとの交流会もあります。詳細は事務所まで。
訪問地:タイ北部チェンマイ県・
メーホンソン県のカレンの人々の村
日程:2002年12月23日～
2003年1月2日(予定)
参加費:19万円 定員:13人

◆東日本・西日本研修旅行のご案内
今年も研修生の社会学習、リーダーシップトレーニングを目的とした研修旅行に出かけます。各地で交流

会を予定していますので、お近くの方にはまたご案内いたします。

- <予定>
- 東日本(11月中旬～下旬):福井-愛知-岐阜-長野-山梨-東京-神奈川
 - 西日本(1月中旬～下旬):鹿児島-熊本-大分-福岡-山口-広島-愛媛-香川-岡山

◆林業体験合宿～枝打 のお誘い
11月初旬に、篠山市大山で枝打を予定しています。不要な枝を切り落とします。これは木材育成には欠かせない作業です。山の空気を吸いながら、大量消費国日本の山林や熱帯木材輸出国の問題、私たちにできることなどを一緒に考えてみませんか。興味をお持ちの方は、ぜひ事務所までお問い合わせください。